

伽羅橋遺跡の発掘調査



空中垂直写真（中世第Ⅰ面）

2001.12.15.



（財）大阪府文化財調査研究センター

【伽羅橋（きゃらばし）遺跡とは？】



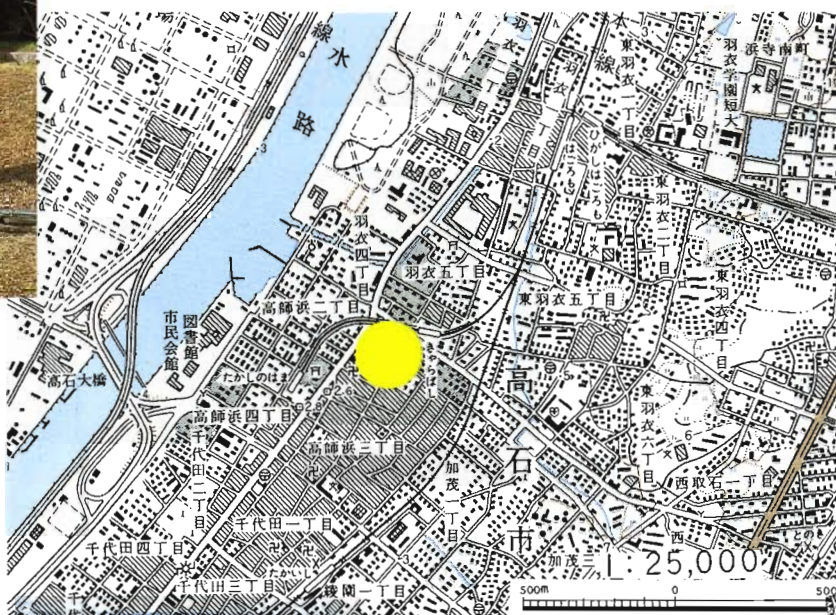
慶応元年の伽羅橋（石橋）

“伽羅橋”の地名は、紀州街道（江戸時代）が通る高石市羽衣4丁目の芦田川に架けられていた“伽羅橋”に由来します。橋自体が“伽羅木”で造られていた為とされています。慶応元（1865）年に架けられた石橋が、現在、高砂公園に移築保存されています。

昭和30（1955）年4月、酒詰仲男教授・宇田川誠一氏・森浩一氏らの同志社大学考古学研究室（先史学会）や泉大津高校・鳳高校地歴部・伽羅橋クラブが中心で行った調査で、平安後期や室町期の瓦や中世土器・南宋（1127～1279）末の青磁皿等、多くの遺物が出土し、関西における中世遺跡調査の嚆矢となった遺跡です。

府道高石北線建設に伴って平成12（2000）年度から今年度にかけて行った調査では、これまで知られていなかった、街道に程近い中世港湾集落と弥生集落の存在とが確認できました。今回は、中世の街のあり様を中心に、発掘調査の成果を公開します。

伽羅橋遺跡は、^{おおさか ふたかいし たかしの}大阪府高石市高師浜1丁目に所在する、弥生中期～古墳後期・平安後期～室町期にかけての遺跡です。



伽羅橋遺跡の位置（平成11年測量）



芦田川に架かっていた地点（現 新羽衣橋）



高石温故会が大正4年に建立した石碑
（揮毫 相国寺狭山和尚）

元南海電車と旧国道の交点にあった石柱（昭和8年移築）



1 区で確認した遺構群



3 基の近接する井戸



3 区Ⅱ面の中世遺構

【すがたをあらわした街（まち）】

調査地は、芦田川が^{しのだやまきゅうりょう}信太山丘陵から運んできた土砂の上に、大阪湾から吹きつける西風によって砂浜の砂が堆積して形成された海岸砂丘（通称羽衣砂丘）にあたります。住宅地化による改変の為、遺構の確認が困難な地点もありましたが、今回の発掘調査によって、居住区と道路、耕作地など、街の形成され様が明らかとなってきました。建物・井戸・^{どこう}土坑（^{ごみすて}ごみ棄て穴など）・溝・池・道路など、様々な施設が検出されました。

《建物》 建物は、柱を据える方法によって2種類に分けられます。一つは、直接柱の根元を穴の中に埋めてしまう建て方で『^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物』と呼ばれるもの、もう一つの方法は、地面の上に^{へんぺい}扁平な石（^{そせき}礎石）を据えその上に柱を載せる『^{そせきたてもの}礎石建物』です。

ここ伽羅橋遺跡で検出した建物は、総て、『掘立柱』タイプの建物ですが、中には、柱穴の中に^{はしらあな}根石（^{ねいし}根石）を入れ、柱の沈み込みを防いでいるものもありました。

中世（鎌倉・室町時代）の遺構は、13世紀初頭～14世紀前半までのもので、大きく分けて、5つの時期差が認められました。

A期：〔紫〕には、方位に近い棟取りの二～三間×数間の建物4棟が調査区のあちらこちらに散在しています。^{はしらま}柱間は概ね五尺（約1.5m）と最も狭い値を採ります。

B期：〔緑〕では、二間×数間の建物が5棟確認できました。柱間は概ね六尺（約1.8m）を採っています。



3 区Ⅰ面の中世遺構



道路遺構・池・土坑



柱穴断面



柱穴掘方に入れられた土器



根石を持つ柱穴



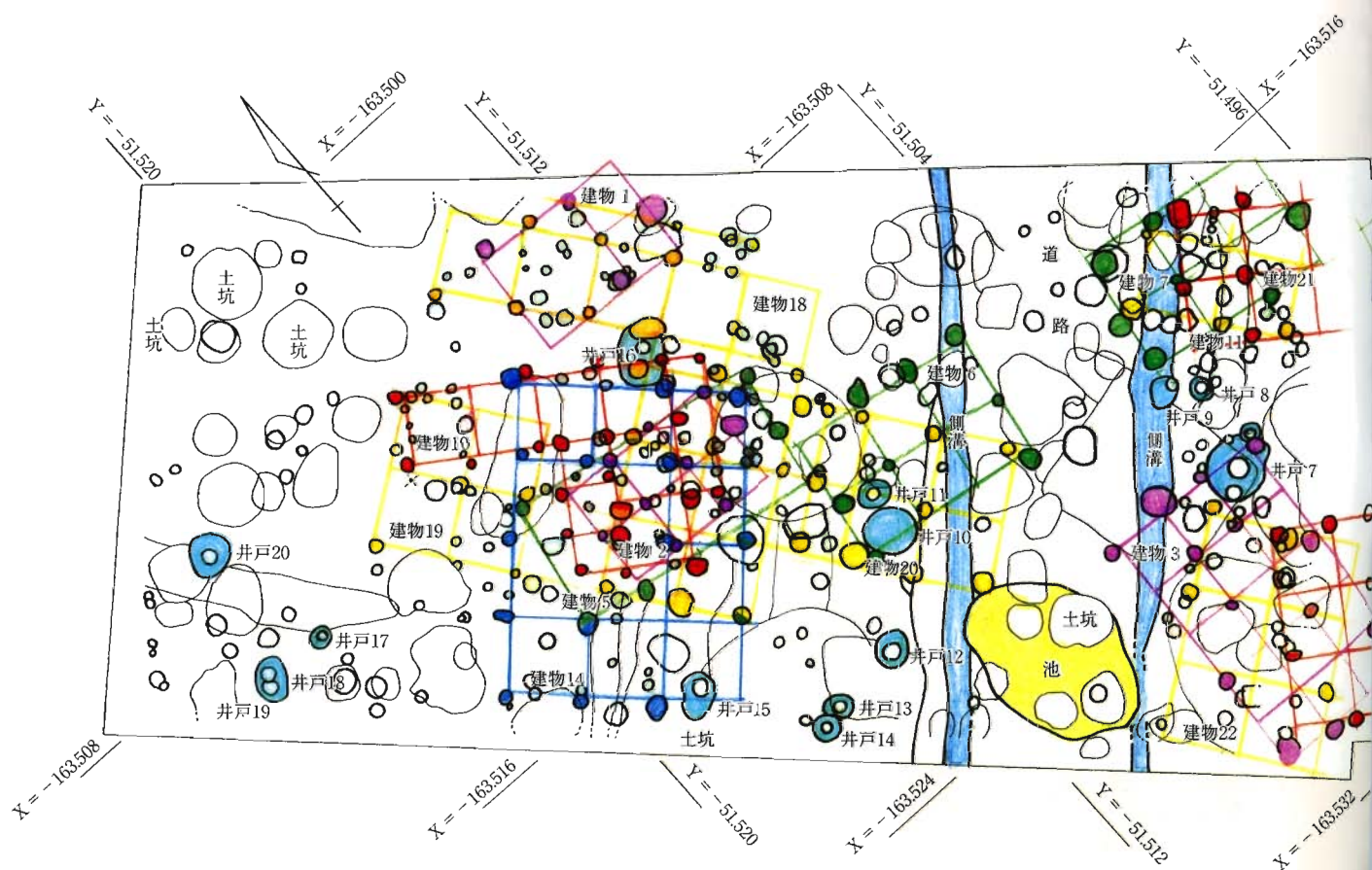
重なりあった建物

C期：〔赤〕には、建物群は、西側と東側との2つに大きく分かります。それぞれの屋敷地が、主殿的建物と数棟の小屋的建物とで構成されていたと考えられます。西側の建物のあった付近には、これ以降、常に、大型の主殿（母屋）的建物が建てられています。下層の道がこの時期のものと考えられます。

上層の道が使用されていたのがD期：〔青〕と考えられます。道を挟んで東西にそれぞれの屋敷地が認められます。建物は、道に平行しています。柱間は七尺（約2.1m）を採るものです。東側では、大型の主殿的建物とその周囲に数棟の小屋的建物とが検出されました。

E期：〔黄〕には道が廃れていたようで、その空間で池・多数の柱穴・土坑が検出されており、屋敷地が一続きのものとなったようです。6棟の建物の間には池が認められ、主殿は“つのや”が付いたり、複雑な形や大型になります。

《井戸》 水を得るための井戸は、遺跡全体で20基が確認されており、特に建物の南東隅にあたる6箇所に集中しています。井戸の規模・深さはまちまちで、また、近接したり重なり合って検出されたものもあり、生活に必要な不可欠な水を得る為、水位の変化により幾度も井戸を掘り直し



1区・3区中世遺構全体図



瓦質羽釜と甕を積んだ井戸



井戸の中をのぞく



羽釜井戸の内部

ていたと考えられます。底を抜いた羽釜（土釜）や甕・曲物を組み合わせて井筒・井側としたものの他、下段の腐蝕した曲物痕跡から、井戸廃棄時に井筒材を抜き取ったと判断されるものもありました。

17基の検出をみた羽釜を利用した井戸は、泉州では珍しいものです。加えて、廃棄時には大半の井戸で、瓦器碗・皿やカワラケを複数枚入れています。また、底部穿孔カワラケも見つかっています。これらは伽羅橋遺跡を特徴づけるものと言えます。

《土坑・溝》 集落内ではいくつかの土坑（埋納坑・ごみ



曲物・羽釜を9段積んだ井戸



捨て穴)が確認されています。中には、カワラケ(京都系の土師器皿)やそれらを真似た地元産の土師器皿を一括大量投棄・埋納した土坑もありました。また、大型土坑や溝などもごみ捨て穴として利用されていたようで、道路側溝や大型土坑からは大量の瓦器碗・皿やカワラケが出土しました。これらの中には柱穴・井戸同様、儀礼的観念から瓦器・カワラケを意図的に投げ入れたと考えられるものがありました。

街の中は、溝・柵・垣などによって区画されて、屋敷地・耕作地(畠)・道路など幾つかの空間に分けられていたと考えられますが、明確には痕跡が残っておらず、判然としない部分もあります。さらに、1つの屋敷地の中も、主たる建物(母屋・主殿)・小屋的なもの・井戸端など幾つかに区切られていたようです。

《道路》 幅約6mで、両側には側溝状の溝が認められるものでした。この側溝はその性格に加え、『一遍聖絵』に見られるようなもので、そのあり様は、田圃の畦道や建物の空間を繋ぐと言うようなものではなく、13世紀前半期～後半期に使用されていた往来の為の道路であったと考えられます。

【街の生活を物語る遺物たち】

出土遺物は、砂堆地の為、木製品の遺存率が低く、生活を物語るには欠くところもありますが、大量の瓦器碗・カワラケ(土師器小皿:京都系手捏ね・回転台土師器)・羽釜(土釜・土鍋)・瓦質甕の在地土器、近江系緑釉、東播磨系須恵器の捏鉢・搥鉢、備前の捏鉢・搥鉢・壺・甕、瀬戸の灰釉・山茶碗、瀬戸窯・常滑系の甕類、長崎大瀬戸町産石鍋や、中国大陸よりもたらされた厦門碗窯製白磁・同安窯系・漳州窯系輸入陶磁などと共に、生業に伴う土錘・蛸壺、粗・中・仕上げ砥石などがあげられます。

【中世港湾集落“伽羅橋(きやらばし)”の性格】

以上に紹介してきたような遺構や遺物という“過去の痕跡”をつなぎ合わせることで明らかとなった中世集落“伽羅橋”の構造や変遷をまとめておきましょう。

調査によって検出された伽羅橋遺跡は、1世紀以上、大きく5時期の変遷があったと推察できます。

各時期とも、いくつかのまとまり(屋敷地)が認められます。柱穴が集中して検出されていて、同一域は、各時期とも、似かよった規格で構成されていたと考えられます。

各屋敷地とも主殿(母屋)といくつかの小屋的な建物で構成されます。それらの外側に水取りの井戸があり、洗い場と考えられる遺構も検出されています。



道路側溝に投げ入れられた
碗・皿



京都系“カワラケ”埋納の土坑



瓦器碗・土釜が投げ入れられた大型土坑



3区Ⅱ面の遺構群



3区中央の建物群

このように、伽羅橋遺跡中世屋敷は、主殿を中心にいくつかの小屋的な建物で構成されます。主殿の規模は時代とともに大型化・複雑化し、居住的要素が増していきます。

出土遺物でも日常食器である瓦器碗・皿や商業活動によりもたらされた物が、比較的多く出土するのもその事を裏付けています。

これら伽羅橋遺跡中世集落は、大量のカワラケ等の出土遺物から、普通の漁村・農村ではなく、都市的集落であったと推定できます。

では、中世港湾都市集落“伽羅橋”とは、どのような集落だったのでしょうか。

その立地は、先にも述べたように、海岸に面しており、漁労に関する道具などが出土しています。また、手工業に関する様々な痕跡も見られることから、色々な職能集団（商人を含む）が集落内に内在していたと考えられます。

一方、集落形成時は、平安時代以来の街道（住吉道）に続く往来の多い幅約6mの道が集落内を横切っていました。当然、集落はこの“道”を意識して形成されていたのでしょう。



泥仏（千体仏）



大雄寺の屋根を飾った軒丸瓦



大雄寺の丸瓦各種

また、付近には、正平年間（1346～70年）〔一説には元亨年中（1321～24年）〕、後醍醐天皇の帰依された三光国師（弧峰覚明）が後村上天皇勅願として建立したと伝えられる“幻の大雄寺址（ダイオウジと呼称か？）”の存在が推定されます。寺院に関係する明確な遺構は検出されていませんが、大量の屋根瓦や泥仏が出土しており、寺域の範囲が推定されます。その創建は瓦から平安後期まで遡るのは明白で、13世紀の鎌倉期には繁栄していたようですが、集落の消長と時を同じくして、南北朝期以後の14世紀後半以降、廃寺化し、耕作地化されていくようです。文献によると大雄寺は和泉における南朝方の拠点寺院で、北朝の拠点寺院堺津久野の家原寺と対峙したといえます。また、“山ノ寺”に対して“浜ノ寺”と称したと言われ、現在の「浜寺」の地名の由来となっています。

これらを総合すると、今回はじめて確認した大規模な集落のあり様は、南朝方の拠点寺院大雄寺の存在、式内社高石神社・大鳥大社の摂社羽衣浜神社（大鳥浜神社）、高石浦・芦田浦（湊・泊）、熊野街道（住吉道）の存在等により、芦田川河口の砂堆微高地に立地した中世前期（鎌倉時代）の大阪湾における拠点的な“中世港湾集落”と位置づけられる遺跡であることが容易に想定できます。



平成12年度出土の土師器・瓦器・瓦質土器（皿・碗・釜・鍋・甕）